

寄稿

医療・福祉現場で働く

聞こえない人たちの

声

-3-

私は脳神経外科を専門とする医師、武地蒼太と申します。現在29歳です。2歳時に後天性混合性難聴と診断され、両耳ともに平均90dB、補聴器を装着しています。

脳神経外科では、主に頭の手術を行います。私は執刀医として手術に入ることがありますが、指導医の指示はマスク越しで声がこもってしまい、読唇もできず、非常に聞こえづらいです。

そこで、私は、補聴援助システムのマイクを指導医に装着してもらい、ワイヤレスで、声が直接補聴器に届くようにしています。雑

音が入らずに声ははっきりと聞けるので重宝しています。また、手術は工程が決まっているので、術前にしっかり予習しておくことが必要です。この予習に関して

脳神経外科勤務での
安全な医療への工夫

は、実際に手術を見学したり、参考書を読んだり、手術動画を見ながら手技を身につけていくので、聴覚障害の有無に関係なく、努力次第でスキルアップできます。

病棟では、各種検査や薬剤投与

の指示出しなどを行います。周囲には、自分ができること、できないことを明確に示し、理解してもらうことを大切にしています。例えば、指示された内容は、すぐに自分も繰り返し声に出して言うことで、相手に確認いただくような工夫をしています。このように工夫をします。このように容に間違いがないかどうかも相手に確認いただくことができ、自分のためだけではなく、医療の安全につながることに役立っているという自負があります。

現在の課題は、複数人での会議での聞き取りです。これには様々な補聴援助システムを上手く使いこなせるよう、試行錯誤を重ねているところです。